

カガヤキ

暫定的補足表題「ウオランタス」
ラテン語でボランティアの意

No.79(2024.11.15 刊行)、広報委員会編集
茨城県立図書館発行
禁複写転載©広報委員会

ボランティア活動内容と実績評価 足跡を残すために「年次報告」 対話型 AI (ChatGPT と Copilot) に質問

茨城県立図書館ボランティア広報 G
通信紙編集長
桜井 淳

私は、頭の中で考えるだけでなく、県立図書館主催の催し物やボランティア各 G の詳細な現場作業内容を把握するため、現場の見学・調査を実施、以下の五つの号、

- ・ No.26 (2015.6.20)、図書館主催催し物
- ・ No.41(2019.1.15)、同上
- ・ No.44(2019.5.15)、三の丸書庫 G
- ・ No.45(2019.6.5)、図書修理 G
- ・ No.47(2019.7.1)、児童サービス G

に掲載、広報 G 以外の八つの各 G すべてに対し(外国語資料整理 G、郷土資料整理 G、資料配架 G、対面朗読サービス G、録音図書制作 G)、実施できなかったことは、心残りでもありましたが、たとえば、資料配架の全体的な流れを見学・調査する

ため、図書館側に取材の申し込みしたところ、「開館前の早朝の作業もあり、危機管理上、応じられない」とのこと、私の判断では、どうしようもないことでした。

私は、誰でも、全体的に、過去のボランティア各 G の活動内容と成果を把握できるように、ボランティア活動の足跡を残すため、通信紙に、ボランティア各 G 委員長の執筆による「年次報告」の掲載を考えたのですが、立ち上げ期に、私と館長の考え方に越え難い差異が生じたため、2016 年と 2017 年の「年次報告」は、残念なことに、見送らざるをえませんでした。10 年間に、以下の八つの号、

- ・ No.25(2015.4)
- ・ No.39(2018.4)
- ・ No.43(2019.4)
- ・ No.49(2020.4)
- ・ No.56(2021.5)
- ・ No.62(2022.4)
- ・ No.70(2023.4)
- ・ No.74(2024.4)

に掲載、自画自賛するようで恐縮ですが、誰でも、足跡をたどり、自身の活動に生かせるようにできたことは、画期的なことだと思ひ、足跡(大きく言えば歴史)を残し、後輩たちに引き継がれることは、県立図書館ボランティア活動の継続的発展のためには、必要不可欠なことのよう思えます。

私は、最初、県立図書館ボランティア各 G の活動内容に対し、手放しで肯定的に位置づけることができませんでした。現場見学・調査と「年次報告」の内容のマクロ分析の結果、県立図書館業務の一部を確実にカバーしていることが分かり、時間が経つにつれ、徐々に、肯定的に位置づけられ

るようになりました。

私は、自身の主観的評価のみならず、より客観的評価をえるため、対話型 AI(Chat GPT や Edge Copilot)に、やや意地悪な質問、すなわち、「茨城県立図書館は、社会的に、評価できますか」「茨城県立図書館ボランティアは、社会的に、評価できますか」「ボランティア通信紙の評価レベルは、高いですか、どのような点が評価されていますか」と質問、以下、回答(AI の回答内容の著作権は質問者の私に帰す)。

「茨城県立図書館は、社会的に高く評価されており、図書館は、資料の貸し出しや多種情報などの提供、館内施設を利用したの各種講座などの催し物を通じて幅広いサービスを展開し、利用者へのサービス及び市町村支援を行っており、また、2023 年度の評価指標では、20 項目中 13 項目で目標値を達成し、95.1 %の利用者が「満足」または「どちらかという満足」と回答し、これにより、多くの利用者から高い評価を受けていることがわかります。

茨城県立図書館のボランティア活動は、社会的に高く評価されており、ボランティアは、図書館の運営を支える重要な役割を果たし、利用者へのサービス向上に貢献し、具体的には、ボランティアは、資料の整理や貸し出し、イベントのサポートなど多岐にわたる活動を行い、また、ボランティア通信「かがやき」を通じて情報共有や活動の報告が行われており、地域社会との連携も強化され、さらに、茨城県立図書館の評価指標においても、ボランティア活動が図書館のサービス向上に寄与していることが示されています。

茨城県立図書館のボランティア通信紙

「かがやき」は、高く評価されており、特に、以下の点が評価されており：

編集技術の高さ：映像や文章の編集が非常に優れており、見やすく、読みやすい内容になっており、

情報の質と多様性：ボランティア活動の報告や地域社会との連携に関する情報が豊富で、利用者にとって有益な内容が多く、

デザインとレイアウト：プロフェッショナルなデザインと配色が施されており、視覚的にも魅力的で、

コミュニケーションの促進：ボランティア間や図書館利用者とのコミュニケーションを促進する役割を果たしており、

これらの点が、ボランティア通信紙「かがやき」の高評価につながっています。」

AI による通信紙の評価については、私が、10 年間にわたり、試行錯誤し、組み立ててきたことが、良く受け止められており、満足できる回答であり、AI は、人間に限りなく近い判断能力があり、正直で、誠実で、公正で、やや八方美人的回答ですが、信頼に足りると感激。

いささか、唐突ですが、私は、登山家として、世界の山で、最も美しいと感じたのは、下記写真のアマ・ダブラムです。



アマ・ダブラムは、ヒマラヤ山脈に位置する標高 6856 m の山で、シェルパ語で「母の首飾り」を意味、切り立った山肌と鋭い稜線が特徴(桜井撮影)。

特集 1 ボランティア活動 45 年

ボランティアとキリスト教（特に茨城での伝道）、および宣教師の働きに関する翻訳書について

水戸キリストの教会執事兼代表役員
鈴木博之

はじめに

ボランティア活動の定義のひとつとして、「個人またはグループが、社会奉仕のために時間と労力を無償提供する自発的行為」という表現が成り立つと思う。それは、一種の利他的行為であり、世の中に蔓延する利己主義とは一線を画すものである。多くの人々は本質的に利己性と利他性の両面を備えており、その間でゆらいでいるが、人によって、また時によって、その傾向が異なるとも考えられる。キリスト教の教義についての詳しい言及は避けるが、特に『新約聖書』では、信仰に伴う自己犠牲、奉仕の精神、利他性が非常に重んじられており、これはボランティア精神との親和性が高いと言えよう。そこで、幕末から明治以降の日本におけるキリスト教の展開と、とりわけ茨城における伝道の歴史、また、それに関連して今回翻訳したカリスマ的宣教師の伝記本の概要などについて述べてみたい。

幕末から明治以降の日本におけるキリスト教の展開

幕末から明治以降の日本でのキリスト教宣教：

1854年に開国した日本でも、本州では1859年（安政6年）よりプロテスタント宣教師たちが続々と来日した。「ヘボン式ローマ字」でも知られるJ.C.ヘボンや、S.R.ブラウン、G.H.F.フルベッキらもこの年に初来日している。こうした宣教により1872年（明治5年）に日本最初のプロテスタント教会である「日本基督公会」が横浜で設立された。また、米国に留学していた新島襄は、宣教師として1874年に日本に帰国し、主に群馬県で伝道するとともに、同志社英学校（後の同志社大学）を創立している。また、その他にも主なミッション系の学校として、青山学院大学、関西学院大学、明治学院大学、立教大学（米国聖公会）、上智大学（カトリック）などが宣教師たちによって、次々と創立された。

日本における「キリストの教会（Churches of Christ：無楽器派）」の始まり：

私が長年所属している水戸キリストの教会を含む「キリストの教会（無楽器派）」の直接的なルーツは、19世紀初頭にアメリカで生じた「（聖書）復帰運動」

（Restoration Movement）と呼ばれる教会改革運動にある。そして、日本における「キリストの教会（無楽器派）」の始まりは、その創始者とされるJ.M.マッケレブが1892年（明治27年）に来日し、先輩の宣教師であるスナッドグラスと共に伝道活動を開始した時点を指すとされている。

マッケレブは、スナッドグラスが1896年に設立した東京の上富坂基督教会（日本

における「キリストの教会〔無楽器派〕」の先駆け教会)で協力しながら、自身では1909年(明治42年)に東京で雑司ヶ谷基督教会を設立し、公式には1914年(大正3年)に認可を受けた。なお、マッケレブから1895年に洗礼を受け、6年間の米国留学と米国の日本人教会での奉仕経験を経て、1903年(明治36年)に帰国した平塚勇之助(日本人伝道者のキーマンの一人)が、マッケレブの紹介により上富坂基督教会で伝道を開始し、1906年に牧師となって40年間仕えた。

マッケレブの後継者たち:

マッケレブは日本へ宣教師として来日したが、それに留まらず、彼に続く他の多くの宣教師や伝道者たちの日本での働きのための道を準備した。その一例として、1916年(大正5年)に来日した女性宣教師のサラ・アンドリュースは、雑司ヶ谷のマッケレブ宅に落ち着き教会活動を始めたが、1917年に静岡県興津町(現静岡市清水区興津)に移り、1926年に興津教会を、1927年に静岡市大岩本町に大岩教会、1935年に清水教会をそれぞれ建てた。サラは、キリストの教会宣教師のうちで、第二次世界大戦中を日本で過ごした唯一のアメリカ人だった。彼女は栄養失調のため戦後に一旦帰国したが、健康が回復すると再び来日して1954年に沼津キリストの教会を開いた。なお、女性宣教師のヘティ・ユーイングは、1924年来日して静岡市中原で伝道し、中田キリストの教会や、焼津の地で大井川キリストの教会の設立に関わった。1942年、ヘティは戦時下で帰国した。また1920年代、「クジヴァレー・エ

ヴァンジェリズム」(久慈川伝道)に参加したO.D.ビックスラー、ハリー・R・ファックス Sr.、E.A.ローズ、B.D.モアヘッドや、1943年にはハロルド・ホーランドなどもマッケレブの指導を受けた。

茨城への伝道と展開(そもそも、なぜ茨城へ?):

茨城の地における「キリストの教会(無楽器派)」の種は平塚勇之助によって蒔かれた。彼は、上記のように東京の上富坂基督教会を40年にわたって牧する一方で、機会あるごとに郷里の茨城県那珂郡塩田村長沢(現在の常陸大宮市長沢)への伝道を敢行した。これは郷土愛、家族愛、身近な隣人愛から発する救霊行動だった。平塚の宣教は大きな成果をもたらし、その郷里長沢の地が茨城伝道の起点となった。

「クジヴァレー・エヴァンジェリズム」
(久慈川伝道):

平塚勇之助の故郷への伝道活動は、やがて来日したアメリカの若い宣教師たちに受け継がれた。O.D.ビックスラー夫妻は、1919年(大正8年)に来日し、都会ではなく田舎で伝道したいという強い志を持っていた。そして1920年、平塚勇之助の求めに応じて那珂郡塩田村長沢の地に着任、1922年に住居兼長沢教会を建設・創立し、そこを拠点に本格的な伝道を展開した(～1935年)。新婚間もなく、召命に燃える夫に従い、異国の電気も水道もない長沢の山村に赴き、黙々と夫を助け、2男1女を立派に育て、ビックスラーに「私の口よりも、アンナの行いがどれほどキリストの福音を伝えたか知れません」と、言わ

せた妻だった。（ビックスラーは、後にシオン学園〔現、茨城キリスト教学園〕の初代理事長を務めた。）1922年秋にはE.A.ローズ夫妻が来日し、1923年から常陸太田で宣教（～1935年）した。1923年、ハリー・R・ファックス Sr.夫妻が福島県の棚倉で（～1930年）、ハーマン・ファックス夫妻（ハリーとは双子でその弟）が久慈郡大子町で（～1937年）、1925年にはB.D.モアヘッド夫妻が来日して、常陸太田町で（1926～1930年）、それぞれ開拓伝道をした。彼らは、この地域の伝道を「クジヴァレー・エヴァンジェリズム」（久慈川伝道）と呼んだ。その活動は、栃木県の烏山、茂木、茨城では小瀬など八溝山系の山奥まで及んだ。モアヘッドは、1929年（昭和4年）に聖書学校である「キング・バイブルスクール」を常陸太田に建てて開校し、それに続いて同年に常陸太田基督教会の教会堂を建てた。（常陸太田キリストの教会は、戦前に創立され、現在も立派に活動している、茨城以北では最も初期の教会である。）1930年（昭和5年）モアヘッドは帰国し、ハリー・R・ファックス Sr.が棚倉から常陸太田に移ってキング・バイブルスクールを引き継いだ。一方で、1920年に渡米し、1927年にアメリカから帰国して長沢のO.D.ビックラーの所に派遣されていた繁國良八（日本人伝道者のキーマンの一人）が、1930年に常陸太田教会の伝道者として久慈郡常陸太田町に移って牧会し、バイブルスクールにも協力した。しかし、日本が軍国主義に傾いて行く中で、宣教師に対する政府の強制帰国命令が出された。茨城では、1941年（昭和16年）の夏に大子町のハーマン・

ファックス一家が、最後の帰国となった。繁國良八は、キリスト教に対する弾圧下で、第二次世界大戦のため帰国させられた宣教師に代わって、その地を守り抜いた。（繁國良八は、後にシオン学園〔現、茨城キリスト教学園〕の日本人初の第8代理事長として学園にも関わった。）

戦後の混乱と日本宣教による教会の誕生：

マッカーサー元帥は終生、米国聖公会〔監督派教会〕会員だったが、1945年11月、東京の下町にある第一保険ビルにある本部で、アメリカ人聖職者の代表団を招集した。マッカーサー元帥は、戦争終結という大惨事によって生じた「霊的空白」を埋めるために迅速に行動しなければならないという緊急性を感じ、キリスト教指導者たちに対して、ただちに1000人の宣教師を日本に派遣するよう促した。彼は言った。「もし、あなたがたがキリスト教で満たさなければ、そこは共産主義で満たされるでしょう」。GHQ（日本占領下の連合軍総司令部）は、各教派を代表する宣教師20人を選び、世界各国から日本に送った。その一人にO.D.ビックラーがいた。

ビックスラーは、来日すると、すぐに茨城を目指した。彼は、日本の聞きしに勝る想像を絶する廃墟と化した街々に涙しつつ、5ヵ月間の働きを終えて一旦帰国し、日本への様々な援助物資と資金の調達をした。アメリカから各教派の宣教師が怒涛のように来日したが、その中でO.D.ビックラーは本格的な日本伝道の準備を整え、1947年（昭和22年）10月24日、再度、ハリー・R・ファックス Jr.（同名のSr.の

長男) 夫妻を伴い、沢山の救援物資を携えて横浜に上陸した。ビッカーは、日本で最愛の夫人の死にも立ち会う事も出来なかった程多忙となったが、この間に現、御茶の水キリストの教会の基礎が固められた。また、常陸太田の繁國良人を訪れ、キリスト教の学校(シオン学園)構想を話し合い、候補地探しを開始した。

茨城地区に戦前蒔かれた種の開花：

ハリー・R・ファックス Jr.に続いて、1948年4月には次男のローガン・ファックス宣教師が、同年1月にはハーディング大学の卒業生であるジョー(ジョーゼフ)・キャノン、チャールズ・ドイル、バージル・ロイヤール宣教師が来日した。戦前に開拓された「クジヴァレー・エヴァンジェリズム」(久慈川伝道)、「キング・バイブルスクール」があった水郡線・常陸太田線及び水戸地区は、ハリー・R・ファックス Jr.とローガン・ファックスの兄弟が、そして、日立市、多賀町方面の常磐線沿線は、ジョー・キャノン、チャールズ・ドイル、バージル・ロイヤールが中心となり、伝道活動を活発に展開した。この結果、終戦直後の物質的・精神的に荒廃した時代の中で多くの日本人が精神的な支柱をキリスト教に求めたことも重なり、茨城の地に水戸、日立、多賀、大みか、勝田、友部、石岡、高萩の各教会などを含む数十の教会が新たに誕生した。教会には求道者が溢れ、伝道会を開くと、どの会場にも入り切れない程の聴衆が集まり、次々に受洗者が与えられて、いずれの教会も教勢が盛んだった。

シオン学園(現、茨城キリスト教学園)の誕生：

1947年(昭和22年)11月16日、アメリカにおける募金運動の中心だったE.W.マクミランが来日して大みか厚生園を訪問した。多賀高専(現、茨城大学工学部)、日立製作所多賀工場、キリストの教会の3グループをはじめ、約250名の教会、日立製作所、地元の有志がこれを迎えて記念野外礼拝、学園建設の祈禱会を催した。1947年12月、シオン学園設立代表者は、文部大臣宛てにシオン学園設立許可願と設立趣意書を提出し、1948年2月には財団法人シオン学園の設立が認可された。また、1948年4月13日、シオン学園の登記申請がなされた。初代理事長にはO.D.ビッカー、初代総長にはE.W.マクミランが就任した。なおハリー・R・ファックス Jr.とジョー・キャノンは、本国に月例報告書を送っていたが、1948年3月のハリー・R・ファックス Jr.の報告書には、「日立製作所(多賀工場)の庶務課で重要な地位(課長)にいた浅野春三氏が、キリスト教の仕事、特に学校に関する仕事に余りに多くの時間をとり過ぎたので、会社で降格させられました。また、岡正一氏は、国立多賀高専に会計課長として勤務していましたが、東京栄転の昇進を断って、多賀に教会を建てることに全てを打ち込みました。」と記述されている。さらに、「学園のために日立製作所から25エーカー(約10万m²)の土地を購入する契約をした。」という記述もある。

日本人伝道者と役員時代の後：

1968年(昭和43年)には茨城キリスト

教大学が開校した。その中にはキリスト教学科が設立され、短期大学開校時の建学の理念をより実現した。さらに、キリストの教会聖書学校が設立されて、伝道者の養成と共に、教会教育のための学び（全国伝道者研修会）や教会の充実を目指した。そして、帰国した宣教師たちに育成された伝道者や、アメリカのキリストの教会系統の大学（神学部、聖書学科など）で学んだ伝道者、日本のミッション系大学や茨城キリスト教大学のキリスト教学科で学んだ伝道者などを中心に、日本人の伝道者が多く育成され、各教会を牧するようになった。各教会は、一部の例外を除き、日本人伝道者と役員（長老・執事）たちで運営される時代となり、今日に至っている。ちなみに2019年時点での日本の「キリストの教会（無楽器派）」数は、青森1、宮城1、茨城18、群馬1、千葉1、埼玉1、東京3、神奈川3、山梨3、静岡8、大阪2、岡山1、沖縄4の合計47教会となっている。また、近年は、アメリカの復帰運動で起源を同じくし親戚でもあるクリスチャン・チャーチ（有楽器派）の大阪聖書学院（Osaka Bible Seminary）及び教会とも親密な交流を持っている。

ジョー・キャンノン宣教師の伝記本

ジョー・キャンノン宣教師の伝記本の翻訳について：

1948年に来日したジョー（ジョーゼフ）・キャンノン（Joe Canon）は、茨城では日立市を中心に、その後沖縄、パプアニューギニア、ウクライナなどで活躍したカリスマ的宣教師である。その伝記本（約

190頁）を、彼の弟子で主にパプアニューギニアなどで共に宣教したデビッド・シットン（David Sitton）宣教師が2014年12月にアメリカで出版した。私もそれをすぐに購入したが、様々な時間的制約もあり、なかなか読み進めることは出来なかった。しかし、日本や世界的に大きな足跡を残したこの偉大な宣教師の働きを日本語でも紹介する必要性を強く感じ、2023年11月から翻訳に着手、諸事の合間を縫って約7ヵ月を費やし翻訳した。（この翻訳本は、キリストの教会伝道学院から2024年12月に数量限定で出版され、一般には市販されない）その内容のごく一部を紹介する。

・若年時代：ジョーは1927年にフィラデルフィアで生まれたが、1930年代初めにカナダのトロントに移り、そこで成長した。彼は、高校時代かなりの不良で、仲間と共にその頃住んでいたリドー・ストリートにちなんで「リドー・ラッツ=Rideau Rats（リドーのネズミたち）」と呼ばれたチンピラのリーダーだった。ある夜、ジョーは、思い付きで教会の窓に石を投げた。どういうわけか教会の牧師が犯人を突き止め、ジョーを追い詰めた。牧師は言った。「君に選択肢を与えよう。一連の聖書研究会に来てくれれば、窓ガラスが割れたことについては告発しない。」さらに、牧師は、教会のユースキャンプにジョーたちを熱心に誘った。このキャンプで、ジョーと仲間たちは福音を通じてキリスト教に深く感銘を受け、洗礼を受けた。

・日本での伝道（1947～1961）：1947年（昭和22年）、O.D.ビックスラーがハーディング大学で、卒業生たちに日本への宣教師要請を訴えた。要請に応じた学生たち

の中からジョー・キャノン、チャールズ・ドイル、バージル・ロイヤーが選ばれ、1948年に来日した。ジョーは日立キリストの教会を中心に茨城で1961年まで活動したが、その間、日立と多賀の間の泉川地区で海岸付近の岩山の中腹に掘られた一連の洞窟群を偶然に発見した。そこには20世帯以上の避難民が住んでおり、手掘りの穴の中で暮らしていた。これらの洞窟は、連合軍の攻撃で家を破壊された人々の防空壕として機能していた。ジョーたちは、その住民たちに伝道すると共に、一軒あたり200ドル、合計4000ドルを調達し、20軒の住居を建てる計画を立てた。1956年7月までに、洞窟内に小さな信徒団が設立され、1957年3月までに300坪の土地に二世帯住宅が8軒完成し、喜びの内に祝われた。[これらはキャノンハウスと呼ばれた。また、文献1)によれば、ジョーは、1956年に日立教会の谷田部安次を含む3名および小木津教会(現、日高教会)の茅根三郎達と共に東北地方の開拓伝道チームを結成し、1957年7月頃に第1回の伝道旅行、1960年の第2回の伝道旅行を挙行了した。ジョーは、1961年に沖縄に移動するが、それを引き継いだチームを含め、約9年間で仙台、盛岡、三沢、八戸、上北の各キリストの教会を誕生させたとも記録されている。]また、彼の家族について、1959年末迄に、家族は9歳未満の子供6人(うち、4人の養子を含む)を擁するまでに増えた。

・沖縄での伝道(1961~1971) : 1960年、ジョーは、沖縄で一連の福音集会を説教し、そこにいた信者たちの信仰と熱心さに感激した。彼らは、ジョー一家に、沖縄

に移るよう熱心に要望し、ジョーは、沖縄に重点を移すという決断を下した。1961年から沖縄での約9年間に福音が前進し、教会が設立され、現地の指導者たちがそれらの世話をするようになった喜びと同時に、キャノン夫妻は、沖縄でのジョーの母親の死、また末娘の突然死をひどく悲しんだ。キャノン夫妻は、沖縄での苦難の数年間に耐え、消耗する落胆を乗り越えた。しかしジョーは、沖縄の信徒たちが、自分がいなくても十分やっていると判断したとたん、ニューギニア島への思いにかき立てられた。

・パプアニューギニア(PNG)での宣教(1971~1984) : 1971年8月、使徒パウロがエペソの信徒たちから見送られた時のようにキャノン一家は、PNGへ向けて那覇国際空港を出発した。それから約13年間で、主に高地に住む未開の部族たちの間で、彼らは様々な危険をも恐れずに、懸命に宣教した。その間、日本からも茨城キリスト教学園の学生を中心に、2回に分けて少なくとも6名がPNG宣教に送り出され、現地の非常に厳しい環境下で、熱心に奉仕してジョーたちを助けた。

・ミッション1000(M/1000、1984~1997) : 1983年1月、ジョーと旧友のラリー・マッケンジーは、テネシー州メンフィスにあるハイランドキリストの教会の長老たちに、ミッション1000のビジョンを持ちかけた。M/1000のビジョンについて尋ねられたジョーは、「地の果てに1000人の宣教師を輩出し、養成し、派遣することです!」と答えた。M/1000の学期は、春季と秋季を通して予定が組まれていた。セッションの合間に、キャノン夫妻は、夏

の間は毎年恒例の宣教旅行で世界中を縦横に移動し、冬の間はカナダで過ごした。カナダでの3年連続の冬の間、ジョーは来るM/1000の授業に合わせて3冊の本を執筆した。この活動は、13年間で3ヵ月間のセッション19回、220名の卒業生を輩出し、52カ国でM/1000の卒業生によるスタッフを擁するという成果を生じた。この活動は、妻ローザ・ベル (RB) の病気のために終了した。

・沖縄への帰還 (1998～2002年) : ジョーとRBのM/1000での働きが終わったとき、二人とも「引退」したくなかった。その頃までに、息子ロビンとその妻シンディは10年近く沖縄で宣教師をしており、彼の両親に沖縄の現場に戻るよう招いた。そして、ジョーたちは愛する沖縄に戻った。ジョーとRBは、喜んで再び宣教師としての道を歩み始めたが、そう長くは続かなかった。悲しいことに、RBの健康状態は、急速に悪化し、やがて24時間体制の介護が必要となった。宣教に十分な奉仕ができなくなったジョーとRBは、メンフィスに戻った。そして、RBは2002年11月に亡くなった。

・ウクライナ (2003～2010年) : ローザ・ベル (RB) の死を深く悲しんだジョーだったが、妻の死の約7週間後に事態は急展開し、ジョーは共に宣教を続けることができる新しい伴侶を見つけた。それはベティ・ダラーという離婚歴のある女性宣教師で、ウクライナでの宣教に意欲を燃やして長年実行していた人だった。知り合っ間もなく、ジョーはこう宣言した。「結婚しよう。そして僕はウクライナに行く。一緒に宣教活動をしよう！」衝撃を受けたベ

ティは、「うーん、しばらく考えて祈らせて下さい」と言った。彼女はすぐに長老の一人に電話し、面会を申し込んだ。その間に、彼女は他の3人に電話してアドバイスを求めたが、どの人もジョーを敬虔な男として称賛した。ベティの実の兄は笑って言った。「妹よ、何を失うことがあるの?」と。ジョーが結婚式でベティの指に指輪をはめたとき、「質入れしないで下さい!」と、さりげなく言ったのが唯一のちょっとした支障だった。観客には、その言葉は聞こえなかったが、ベティが本能的にジョーを蹴るかのように足を上げるのが見えた。そのシーンは結婚式のビデオに収められている。ベティと共にウクライナに行ったジョーは、キリストのための宣教師としての生活を取り戻したことに、明らかに満足し、喜んでいた。ウクライナでの宣教活動の晩年、ジョーは認知症が急速に進行し、また2010年7月、ジョーはロンドンのヴィクトリア駅で糖尿病の発作を起こして倒れた。

・最後の出発 (2011～2012年) : 二度の糖尿病性昏睡に襲われ、肉体的な疲労に苦しんだ後、ジョーはメンフィスに帰って来たが、83歳の彼の心には、まだウクライナでやり残したことがあった。しかし、ジョーはもはや、世界中を旅する体力も精神力もなかった。2011年5月、ハイランドキリストの教会は、ジョーとベティ、そしてローザ・ベル (RB) の思い出を称え、ジョーの日本、沖縄、パプアニューギニア (PNG)、ウクライナでの約65年にわたる宣教師としての奉仕を祝った。ジョーとベティは一緒に良い晩年を過ごした。彼は、機会があればアコーディオンを弾き、

孫たちと過ごすことを喜んでいて。亡くなる1ヵ月前、真夜中に救急車で病院に運ばれ、3週間入院した。そこからホスピスに移された。ジョーは、そこで僅か5日間を過ごし、亡くなった。

ジョー・キャノンの伝記本の訳者として

ジョー・キャノンの伝記本（日本語タイトル）「勇ましく戦う兵士」を訳していて私が強く感じたのは、『新約聖書』のマタイの福音書28章19-20節の「イエス・キリストの大宣教命令」に徹底的に忠実に従ったジョーとローザ・ベルの純粋な魂、そして不幸にも流産によって少なくとも4人の赤ちゃんを失ったが、「貧しい者たちの中の最も貧しい者」のために何かしたいと常に注意を向けていた彼らが、4人の戦争孤児と養子縁組をして家族に迎えた愛情深さや、終戦直後に住む所の無かった人々のために進めた住宅建設といった福祉の心、ジョーの自分を顧みず人々の救霊を第一にする熱意と使命感、そして、どんな困難にも負けない勇敢さと度胸などである。

教会奉仕とボランティア活動

教会奉仕とボランティア活動について、私自身については、当初から変わらず水戸キリストの教会員であり、信仰歴は約47年、執事（役員）歴は1991年4月から約34年、代表役員歴は2010年4月から約15年になる。一般信徒は、教会において何らかの無償奉仕をし、自由献金をするので、その意味で個人差はあるが一種のボランティア活動と言えると思われる。（な

お、私自身や水戸教会のボランティア活動については、既に茨城県立図書館通信誌に数回寄稿しているので、それ以外の特記事項は現時点で殆んどなく、ここでは省略する）一方、宣教師や伝道者については、個人差はあるものの、教会や支持団体、個人などから或る程度のサポートを受けて伝道・宣教活動をしているという意味では、一般信徒のボランティア活動とは異なると言える。しかし、宣教師や伝道者へのサポートは生活費や伝道のために最低限必要な費用であって、個人的な利益を得るためではなく、利他的な要素が非常に強いので、広い意味でのボランティア活動と見なしても良いと考える。実際、キリストの教会の伝道者・宣教師の多くは、信徒からの献金（サポート）だけで生活できるケースは少なく、他に生活費をまかなうための仕事（アルバイト含む）を持っている場合が多い。彼らは、いわゆる神への献身をしているので、一般信徒のボランティア活動との比較は、できないと考えている。

文献

- 1) 伝道学院30年記念誌編纂委員会『キリストの教会130年誌 伝道学院30年誌』（キリストの教会伝道学院（2019年9月））
- 2) CEC 宣教記録出版会『キリストを茨城へ』（若き日のハリー・R・ファックス Jr.およびジョー・キャノンの母国への月例宣教報告書集の翻訳書）（2000年7月）
- 3) デビッド・シットン（David Sitton）著 “Hard Fighting Soldier”の翻訳書「勇ましく戦う兵士」（2024年12月）

特集 2 国際的専門知

執筆記事 6 編の論理化と体系化

元日本原子力研究所職員
山本俊弘

これまで桜井淳委員長のご厚意により、本ボランティア通信のNo.27, No.34, No.37, No.53, No.76, No.77の6回にわたり記事を書く機会をいただきました。ここでは、これらの過去の記事の論理化と体系化を図ってみたいと思います。

No.27（平成27年8月1日発行）では、図書館の利便性をより高めるためにはボランティアの役割が重要であることを訴えました。ボランティアと行政の共働は、図書館の運営のみならず、すべての市民活動全般において重要な役割を占めていることは言うまでもありません。

No.34（平成29年4月5日発行）では、デジタルトランスフォーメーションが進展した社会における図書館の役割と機能の変革を展望してみました。この後、7年が経過しましたが、これらについて明確なことを語るには、さらに年数を要しそうです。

No.37（平成30年3月5日発行）では、オペラ鑑賞法について書いてみました。この記事を書いた6年前と比べても、現在では多くのオペラがインターネット上の動画投稿サイトで視聴できるようになっており、より容易にオペラを鑑賞できる時代となっています。大枚をはたいて、オペラのLPレコードを購入しなければならなかった時代とは、隔世の感があります。

No.53（令和3年2月15日発行）は、コロナ禍の最中で書かれたものであり、コロナ禍で進展したリモート会議の功罪について考察してみました。感染拡大防止のためやむを得ず始まったリモート会議ではありますが、多くの人とその利便性を認識し、コロナ禍終息後に日常生活が戻ってきても、多くの会議がリモートで行われることが定着しています。リモートワークの普及やデジタル化の加速は、コロナ禍の予期せぬ奇貨と言えるでしょう。

No.76（令和6年7月15日発行）では、数学者ブノア・マンデルブロ博士(1924-2010)が創始者とされるフラクタル図形の不思議な世界を紹介しました。自然界の複雑なパターンや秩序がフラクタルとなって出現していることから、フラクタルと言う純数学的な概念の存在を、創造者の実在の根拠として挙げる人もいます。

No.77（令和6年9月15日発行）では、平成11年9月30日に茨城県東海村で起こった臨界事故の停止作戦について5つの大きな間違いについて指摘しました。さらに6つ目の間違いを追加するのなら、事故から12日後に水戸芸術館で予定されていたソプラノ歌手のバーバラ・ボニーさんの公演が、中止になったことでした。中止の経緯については、まったく知りませんが、少なくとも公演の時点では水戸市は、完全に日常に復しており、にもかかわらず公演中止は水戸市民や日本国民にとっても大変残念な出来事であったのは言うまでもありません。

編集後記

茨城県立図書館ボランティア通信紙には、何を掲載しても良いわけではなく、いくつかの社会的な常識に則っており、それらは、

- ・ボランティアにかかわること、
- ・図書館にかかわること、
- ・水戸市内の組織(たとえば、茨城県近代美術館や水戸芸術館など)のボランティアにかかわること、
- ・水戸市や茨城県などにかかわること、
- ・通信紙は、茨城県立図書館 HP に掲載されるため、国内外の文化にかかわること、
- ・特定の宗教宗派の特徴にかかわることは、意識的に避けているものの、「宗教社会学」(Sociology of Religion)の視点から、社会問題やボランティアとの関係で採り挙げることは、問題ない、

などであり、通信紙 No.79 では、上記の暗黙の決まりの範囲内で、戦後、茨城県の特異な社会現象について、ことの源を辿り、社会的必然性に着目し、学術的文献を基に、今日、その流れを引き継いでいる米 Church of Christ(プロテスタント系)の「水戸キリストの教会」の代表者による考察を採り挙げましたが、根底にあるものは、人間の心の問題、分かりやすく言えば、ボランティアにつながるものの考え(各自の自主的積極的自立)です。

鈴木さんには、これまで、通信紙に、つぎの三編の執筆を依頼しましたが、いずれもボランティアのお手本のような内容、

- ・39年間のボランティア体験(No.34)、

- ・水戸キリストの教会での ボランティア活動とコロナウイルス対応(No.59)、

- ・コロナ禍を乗り越えて Zoom によるオンライン・ミーティング(No.72)、

今回は、ライフワーク的なまとめを依頼しましたが、日本における鎖国開国後のキリスト教の歴史、特に、茨城県における歴史について、詳細に記されており、特に、鈴木さんが翻訳したジョー・キャノンの伝記『勇ましく戦う兵士』の要旨まで記し、全体のまとめは、学術論文に値する優れた内容です(論文のため、「である」調)。

山本さんには、これまで、通信紙に、つぎの六編の執筆を依頼しましたが、いずれもオリジナリティが高く、国際的な文化を紹介していただき、

- ・国内外図書館の利用経験と感想(No.34)

- ・県立図書館所蔵資料オペラ鑑賞法(No.37)、

- ・未来型図書館の空想(No.40)、

- ・リモート会議のメリットとデメリット(No.53)、

- ・フラクタルは隠れた暗号か(No.76)、

- ・今だから言える (今でも言えない?)

間違いだらけの東海村臨界事故停止作戦(No.77)、

特に、「県立図書館所蔵資料オペラ鑑賞法」の内容は、オペラについての最高の見識がなければ表現できないことであり、今回は、これまでの六編の論文の論理化と体系化を依頼しましたが、テーマの異なる論文の論理化と体系化は、難しく、遠慮してか、一歩手前で踏みとどまったような展開になっており、すべてを語らなかつたことが、格調高さの証明と受け止めました。

桜井 淳